

令和元年7月5日発行(毎月5日1回発行)  
第59巻7月号(通巻720号)

# 風土



## なんの湯か沸かして忘れ初嵐

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

「初嵐」は七月末から八月にかけて吹く風のこと、秋を知らせる前ふれです。畑の唐黍などがこの風で吹きなびくので、「畑嵐」とも呼びます。桂郎師は「今日はことのほか風が強いな」と、七畳小屋を出て確かめたのです。まわりの竹もよく撓っており、「そうか。初嵐か」と頷き戻ると、葉缶が沸きに沸いているではありませんか。自分で沸かしながら「はて、何に使おうとしてたんだっけ」と思い出せないのです。

## 飴色に澄みて葉月のまむし酒

(句集『高蘆』より昭和四十五年作)

この句の「まむし酒」は岩手県和賀郡湯田町に住む、「風土」幹部同人の小林輝子さんより頂いたものです。「まむし酒」にも「新走り」、「三年物」、「十年物」とあり、「飴色」から年代物であることがわかります。桂郎師はその色に目を細めています。

## 盆 三日 歩幅を見せぬ妻とゐて

(句集『幻』より平成九年作)

器師は平成八年十二月二十四日に、病氣療養中の妻を失いました。その時の絶唱が「妻死なすわが白息のみゆたか」であり、「寒椿まなこ閉づれば妻の咲く」です。「盆三日」の句は平成九年作とありますから初盆になります。一年もたたぬ初盆ですので、起き伏しに妻の気配を常に感じています。しかし仏壇の妻の遺影を見ると死を認めざるを得ません。眼を閉じれば妻はそばにいますのですが「歩幅を見せぬ」と詠まざるを得ないのです。

## 山川につまづき盆のものの流れ

(句集『幻』より平成九年作)

これも盆を詠んだ句です。「盆のもの」とは妻のたましいや祖霊のたましいをあの世へ送る「茄子の牛」のことです。迎えるときは「瓜の馬」で早く来てもらい、送るときは「茄子の牛」でゆっくり帰ってもらうのです。またたくまに盆が終わり、故郷の山川からあの世へ送りだすのです。「山川につまづき」は、妻や祖霊のたましいが名残りを惜んでいるかのように読めます。

法 然 忌 南 う み を

花びらの吸ひつく畦を塗りにけり

藻をまとひ田螺田主と申すべく

ぐわらぐわらと馬穴の田螺搦み見せ

御忌の僧さへづるごとく唱へ出づ

桜しべ降り観世音また古ぶ

いもぼうの芋の曲がりも法然忌

みづうみへ恋の蛙のにごり水

大原志  
三句

春志へ田溝の水のひるがへり

直会の餅飛んでくる蓬かな

田明りに食ぶ春志の草の餅

オムレツの腹ゆたゆたと春くるる

蓮浮葉さつそく亀の頭に突かれ



# 竹間集

同人作品



万愚節

間島あきら

拍手して終る総会万愚節  
春眠と言ひつ暁には起きぬ  
開花告ぐ標準木に人の群れ  
正風の末葉にゐて花仰ぐ  
もう二段昇り枝選る桜守  
桃開くこの畑今年限りとか  
紫雲英田を座とし田の神降り立ちぬ

鎌倉

内藤静

谷戸深く椿を葺きて花御堂  
苔青み墓に寸心居士とのみ  
臨済の伽藍聳ゆる春霞  
うぐひすを裾に半僧坊権現  
柏槇の齡たたへよ囀りて  
青鹿毛のよぎる一瞬風ひかる  
的中の矢の弾きたる樟若葉

風光る

鈴木庸子

縄文の出つ臀土偶うららなり  
小高きは出城址とや耕せり  
舟乗り場ある蔵町や柳の芽  
一の鳥居二の三鳥居春霞  
連なりて行く弓袋風光る  
振り向いて首鳴る春の寒さかな  
なるやうになりゆく余生葱坊主

三鬼の海 浜 福恵

春な北ら風い 三鬼の海の蘇る  
夫の忌浜に相替すの山独活一本買ひ足しぬ  
一村一寺深山に咲いて仙桜  
畦を塗る大江山嶺真向ひに  
叩いて焼いて古里ぶりの干蝶  
「海が躍る」と蚕の一言桜鯛  
地を染めて桜蕊降る登美子の忌

皐月富士 門伝 史会

灰若芽もどす鳴門の渦の色  
ものの芽やひと雨ごとに名乗り上ぐ  
麗らかや花嫁のゐる植物園  
桃新府・桃源郷四句の花単線運転乗り継ぎて  
鳳凰三山パステル調に陽炎へり  
摘花して花の明るさ地に移す  
桃源郷どこに立ちても皐月富士

花吹雪 鈴木 石花

城跡に一本高き白木蓮  
一本の梅が香に寄る婚約者  
若者の不在者投票竹の秋  
堤防に顔出す土筆童歌  
花月夜義父五十回忌修しけり  
終点まで溪谷列車花吹雪  
三度目も花期病みし夫退院す

花水木 山田 暢子

今日よりは「令和」の空や風光る  
花ミモザこの世眩しきこと続く  
コンビニの中にポストや春の雨  
囀りをメールの中の動画より  
椅子ひとつあれば足りけり花水木  
母の日や自分に買ひしものばかり  
人生は晩年も佳し花菜漬

羽田首夏

中根美保

管制塔 玻璃ほの暗く夏に入る  
滑走路 あはひに草の茂り初む  
夏の海遙かに小さき機影見ゆ  
轟音も親し五月の滑走路  
コンビナート影の揺るがず夏霞  
緑さす展望台にカレーの香  
ANA機体工場  
保安検査汗の赤子を抱き並ぶ  
薫風や互ひ違ひに機の並ぶ



ハンマーの長き余韻も夏めける  
夏空へ向かひてひらく格納庫  
トラツクが潜る薄暑の大鳥居  
樟若葉人影見えぬ御神砂所  
路地裏に漁協事務所や釣忍  
鳥東京湾野鳥公園の園海桐の花を結界に  
青蘆や飛行機すでに低空に  
揚羽蝶双眼鏡の視野に入る  
青鷺や冠羽を風のなすままに  
泥の上に今ぬし蟹を見失ふ  
蟹穴に生ひしばかりの葦そよぐ  
白鷺やさざなみ脚の抜き差しに

# 山河集

同人作品



南うみを選

遠足の子に風の音水のご糸

山田健太

駅を出て前の前ゆく春日傘  
ねんごろに八十八夜の落し蓋  
春日ふくらむ子の腕妻の指  
蚕豆の畝近きまで新居かな

鏡台の奥の手紙や春の逝く

岡本尚子

補助輪のとれたんぽぽによるめきぬ  
梨の花畑に放つチャボの群れ  
耕して風に地球の香り出す  
春の星猫の片目の返事かな

渦潮の雫のたるる若布かな

森田節子

石切りし跡の絶壁風光る

山の絵図四方に天守や初燕

蛇穴を出づ木の洞の注連囲ひ  
桃畑の摘花まつ幹すみし幹

深吉野は半月遅れ山ざくら

上辻蒼人

西行の縁の寺の山ざくら  
鎮花祭太鼓を森の神に打つ  
禰宜みちは香りの強き花馬酔木  
強情や筍鋏を撥ね返す

御忌の塔ついと過りてつばくらめ

谷田明日香

綺羅なしてゆるゆる進む御忌の僧  
女坂にぎはふ弁当始めかな  
残花にしてどつと花びら吐き出しぬ  
早苗田のまあるく囲む古墳丘

# 風土独語／南 うみを



補助輪のとれたんぼぼによるめきぬ

岡本 尚子

これは「たんぼぼ」と幼子の取り合わせです。幼子の自転車はやつと補助輪が取れましたが、公園を一周するにはまだまだぎこちない走りです。「たんぼぼによるめきぬ」が幼子のあどけない喜びを伝えていきます。

花の中花束抱へ退任す

上村 葉子

花の頃は出会いと共に別れの季節でもあります。「退任」とありますので、公務を勤め上げた人物のお別れ式です。胸には祝いの花束、仰げば今を盛りの花明りです。この明るさの中で、人物の心には達成感と一抹の寂しさが漂っています。

桃畑の摘花まつ幹すみし幹

森田 節子

一連の作品から甲府での吟行と解ります。甲府は葡萄と共に桃の産地です。春になると山裾は桃の花でおおわれます。これは桃畑の摘花の様子を描いたものです。「摘花まつ幹すみし幹」で桃畑の桃の木の在り様をリズムカルに伝えていきます。

深吉野は半月遅れ山ざくら

上辻 蒼人

吉野の山桜は「吉野千本桜」と言われ、その見事さは喩えようがありません。シーズンともなると全国から花を求めて人々が集まります。作者は吉野の更に奥の「山桜」をいま愛でていきます。訪れる人も少ないですが、作者にとっては故郷の「山桜」なのです。「半月遅れ」にその土地に住んでいる者の自負が伝わります。

遠足の子に風の音水のこと

山田 健太

俳句は読み手の想像力を補充してはじめて成立します。ですから作り手は読み手の想像力をいかに刺激し、作品世界に誘導するかでその力量が問われるのです。この句は「風の音水のこと」という必要最小限のことばで、「遠足の子」の多様な驚きを読み手に想像させています。つまり野を吹く風、木立を抜ける風、山から降りてくる風など様々な風音を、また小流れの水や瀬を流れる水、または岩を奔る水の声に驚く子供たちの表情を読み手にしっかりと想像させるのです。自然に包まれて、「遠足の子」たちがなんと生きいきしていることでしょう。

癒えし身に山河ありけり初桜

小原芙美子

病が癒えた身に、何が一番しみいるかと自らに問うた時、「山河」と答えたのです。それは故郷の山河であるかもしれない。終いの地の山河であるかもしれない。再びその風土に包まれている喜びが「山河ありけり」の断定なのです。まして日本人の心の花の「桜」にも見えることができたのです。簡潔なことばで作者のしみじみとした心持が伝わってきます。

# 風土集



## 南うみを選

鉄幹の洞を覗きぬ戻り寒 五條 上辻 蒼人

目張り寿司山盛りにして梅見茶屋

鱒船夕日の中を戻りけり

屈折の明治の玻璃戸春日差

春日野の間整へて修二会果つ

小倉山の時雨亭跡春かすみ 相模原 岡本 尚子

湖東三山霞の中の仏かな

奈良坂や霞の中の金の鴟尾

帰り来て衣の霞はらひけり

春シヨール背すぢ伸ばして歩みけり

光る海見下ろす尾根の宵しづく 立川 眞弓 真翁

アイゼンの雪搔く音や露の臺

大空に黒富士聳ゆ二月かな

白魚の群れの動きに水面揺れ

大の字に寝転ぶ土手や草萌ゆる

かたかごの反りゆるやかとなりけり 水戸 山田 健太

退職の妻のかがやく朝寝かな

啓蟄や針箱に胃の常備菓

山盛りのレタスの前に困惑す

ものの芽の出かかりし頃疼きたる

黄水仙揃ひの色の雨合羽 舞鶴 谷田明日香

春昼の電車胎内とはかくや

木馬路のところどころの萇かな

橋くぐる婦唱夫随の春の鴨

ランドセルピンクに黄色風光る

沖はるかみえぬて遠し菜の花忌 横須賀 平田きみこ

いつまでと思ふ雛を納めけり

涅槃西風寺の孔雀の眼状紋

夫の忌の「酔心」に添ふ花菜漬

師の花や山の萇に屈みては